

## 集合知で、社会に風を通す

1968年に創刊し、152号目を迎える広報誌くすのき。

今号では、これまで協会に所属してきた人々、  
そして今も実践を重ねる多くの人々の中にある、  
まだ言葉として定着していない価値に目を向けている。

図面や数値、成果としては表れにくいものの、  
現場や関係の中で積み重ねられてきた判断や感覚。  
そうした暗黙知ともいえるものが、  
協会の活動を静かに支えてきた。

協会内には、建築士事務所やそこに関わる人々が持つ  
すでに在る資源を汲み取り、関係性を整理しながら、  
長い時間軸で社会に残るものをデザインしてきた視点がある。

個ではなく、協会として。

複数の知識や洞察、経験が重なり合う集合知は、

Know howの束ではなく、Know who。

身を置き続けた判断と身体記憶だ。

それにより、地域や社会と向き合うための土壌が育まれてきた。

本誌が、その一端に触れる機会となることを願って。

### Cover story 表紙の裏側

表紙ビジュアルは、兵庫県建築士事務所協会事務局の会議室で行った音響シミュレーションのデータをもとに制作した。音が空間に滞在し、反復され、やがて残響として消えていく。そうした複数の時間経過を重ね合わせ、一つの風景として立ち上げている。今号では、協会内に蓄積された暗黙知をどのように可視化し共有していけるのかをテーマとしている。巻頭インタビューで語られた身体性の共有という視点は、その価値に触れるための重要な手がかりとなった。音響は、建築における身体性を代弁する要素のひとつだ。心地よさは瞬間的に判断できるものではなく、時間の中で少しずつ身体に染み込んでいく。単一の瞬間ではなく、重なり合う時間に身を置き続けること。その姿勢そのものが、協会に蓄積されてきた暗黙知のあり方と響き合っているように思える。

